

令和5年度入学式 学長式辞

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。ようこそ、鹿児島国際大学へ。本学の全教職員を代表して心から歓迎申し上げます。

この大学が創立されたのは1932年。今から91年前のことです。現在、鹿児島市立長田中学校が建っている場所に鹿児島高等商業学校という校名で開設されました。それ以来、幾度か名前を変えながら、長く経済学と商学を中心とする社会科学系の教育機関として歩んできましたが、1982年には社会学部（現在の福祉社会学部）、2000年には国際文化学部、そしてこの春、看護学部を開設し、今なお南九州を代表する私立の総合大学として成長し続けています。これから、みなさんとともに、先人たちが大事に育ててきたこの学びの場の新しい歴史をかたち作っていくことを楽しみにしています。

さて、看護学部の第1期生として入学されたみなさん、みなさんをこの大学にお迎えできることを心からうれしく思います。みなさんの多くは、ご自分たちも高校入学当初からコロナ下で制約の多い生活を送ってこられました。またこの間、逼迫する医療現場で働く人たちの困難で苛酷な業務の実態について数多くの情報に接してこられたと思います。看護師や保健師が「こんな大変な仕事だったら、いやだ」あるいは「自分にはとても務まらない」と尻込みする人も少なくなかったでしょう。それでもみなさんは、「命と健康を守る仕事をした

い」、「人の役に立ちたい」という強い思いを持って本学の看護学部に入学されました。その高い志と固い覚悟に心からの敬意を表します。

私の専門はイギリス文学ですが、看護師をめぐる英文学の名作といえば、リットン・ストレイチーの「ナイチンゲール伝」が思い出されます。1918年に刊行された『ヴィクトリア朝偉人伝』という本に収録された、フローレンス・ナイチンゲールの伝記です。ストレイチーはこの伝記のなかで、「クリミアの天使」、「ランプを手に病室を巡回する慈しみ深い貴婦人」といった一般的なナイチンゲールのイメージとはまったく異なる人物像を描き出しています。

ナイチンゲールは、裕福な家に生まれ、ゆくゆくはお似合いのお相手と結ばれて幸せな家庭婦人になることが期待されていましたが、若くしてナースになることを決心します。実は当時、ナースといえば誰にでもできる病院の卑しい下働きとみなされていました。れっきとした家柄のお嬢さんがつくような仕事とは考えられていなかったのです。当然、周囲の人たちは大反対しますが、彼女はそれにまったく耳を貸さず、従軍看護師になるのです。折しもクリミア戦争が勃発。戦地の陸軍病院に乗り込むと、その頃、改革が遅れ悲惨な状態だったイギリス軍の医療体制の刷新を成し遂げていくのです。軍人や陸軍省の官僚が束になって頑なに抵抗しても、彼女は、手段を選ばず、ストレイチーの言葉を借りると「悪魔に取り憑かれたような」猛烈な働きで改革を次々と成し遂げていきました。今日、看護師が、人々の命

と健康を守る高度な専門職として重んじられているのは、この彼女の働きがあったからに他なりません。

ここに集まったみなさんは、入学する学部学科を問わず、卒業後は、「人の役に立ちたい」、「求められる役割を果たせる人になりたい」と思っておられるでしょう。それはとても素晴らしいことです。しかし、大学で学ぶ目的は、そのことに加えて、自分を取り巻く世界に何らかの変化をもたらせる人になることでもあると、私は考えます。ナイチンゲールが、ただ周囲に求められる役割を果たした慈しみ深い「ランプの貴婦人」であるにとどまらず、一面において「悪魔に取り憑かれたような」変革者でもあったということを心に留めておきたいと思います。

世界を変えるためには、時にはナイチンゲールのように「悪魔に取り憑かれる」ことも必要かもしれません。しかし、それは誰にでもできることではありませんね。そこでもうひとり、世界を変えるかもしれない行動をとった身近な人物を紹介したいと思います。この4月から本学経営学科4年生になった岩拓夢（いわ たくむ）さんという学生です。

岩さんは昨年4月、友人の鹿児島大学の学生さんとふたりで鹿児島市電に乗っている時、困っている女子高校生を助けました。座っていた高校生の前に立っていた男性が突然嘔吐し始め、高校生は頭から吐瀉物をかけられてしまったのです。岩さんと友人は高校生を次の停

留所で降ろし、コンビニでタオルや水を買って、頭などについた汚れを拭き取り、家族が車で迎えに来るまで付き添ってあげたそうです。その時は互いに名乗ることもなく別れたのですが、その後、南日本新聞でこのことが報じられます。名乗り出た岩さんと友人は高校生と再会。その時の様子も新聞で取り上げられました。6月2日の南日本新聞の記事によると『自分が吐かれた立場だったらと思うと、放って置けなかった。……』と話す2人に「高校生は」『自分も困っている人には優しくありたい』と誓った」とのことです。

私は、この「自分も困っている人には優しくありたい」という高校生の言葉を読んで、ある映画を思い出しました。2000年に公開された「ペイ・フォワード 可能の王国」(原題 *Pay It Forward*) というミミ・レダー監督の作品です。この映画の主人公はラスベガスに住む中学生。ある日、彼は社会科の授業で「世界を変える方法」を考え、実践してみるという宿題を出されます。少年は、人に親切にされたら、親切にしてくれた人に「お返しする」(ペイ・バックする)のではなく、別の3人に親切を「前に送る」(ペイ・フォワードする)というアイデアを思いつきます。そして、自分なりに、困っている人を助けようと色々やってみるのですが、どれもこれもうまくいきません。たとえば、ドラッグ中毒のホームレスの青年に手を差し伸べ、立ち直らせようとしませんが、青年はすぐにまた薬物に身を持ち崩してしまいます。努力は空回りするばかりです。そうこうするうちに少年は不慮の事故で亡くなります。すると驚いたことに、亡くなった少年に花を手向けようとする人々がその家に押し寄せます。少年の家に続く道という道が車列のヘッドライトで埋め尽くされるというのが、この

映画のラストシーンです。実は少年自身も知らないうちに、この「ペイ・フォワード」の運動が国全体に拡大していたのです。

岩さんと友人の鹿大生がちょっと勇気を出して高校生に助けの手を差し伸べたことで、高校生は、今度は自分が他の人に優しくしたいと思いました。次に彼女が困っている人を見かけた時には、岩さんたちのことを思い出し、目の前の人に手を差し伸べる勇気を持つことがきっとできるでしょう。また、新聞でこの記事を読んだ人たちのなかからも、同じように、アクションを起こす人が現れることでしょう。こうして世界は、岩さんたち自身も気づかないうちに、少しずつ、みんなにとって過ごしやすい場所に生まれ変わっていくのです。

さて、ここに集まったみなさんは、それぞれにできることとできないこと、得意なことと不得意なことを持っています。さまざまな障がいや発達特性、いろいろな種類の個性を持っている人たちもいます。「本当の強さは『ひとりじゃない』って言えること」。これはシンガーソングライターの山下達郎さんの「ずっと一緒さ」という曲の歌詞の一節ですが、人間がさまざまな集団を形づくることの意味をこれほど見事に言い表したフレーズを私は他に知りません。自分ひとりで何でもできる「強い」人間になるのも立派なことですが、そんな人間ばかりだったら集団を形成する必要はないわけです。困った時には周りに助けを求められる。そして、自分にできることがあれば、助けが必要な人に手を差し伸べられる。大学というコミュニティもまた、この助け合いができる人たちの集団でありたいと思います。

今、みなさんは、鹿児島国際大学という学びのコミュニティの一員として迎え入れられました。互いに助け合い、また、高め合いながら、一歩ずつ着実に自己の可能性を拡げていきましょう。教職員一同、みなさんの歩みに寄り添い、心を尽くして成長を手助けします。みなさんに、心からの「おめでとう」を重ねて申し上げ、入学式の学長式辞といたします。

令和5年4月4日

鹿児島国際大学学長 小林 潤司